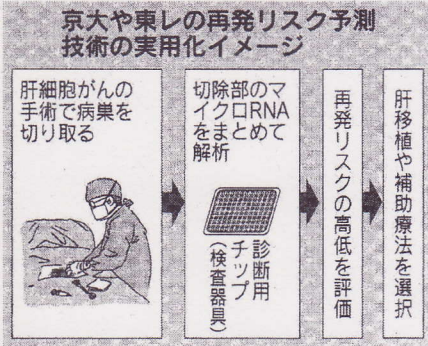


肝細胞がん 再発リスク予測可能に

京大・東レ 予防治療効果高める

京都大学薬学部の佐藤史顕准教授や医学部の波多野悦朗講師、東レなどの研究チームは肝細胞がんの再発リスクを予測する手法を開発した。人間の体内でたんぱく質の合成などを調整する物質を測ることで見積もる。再発リスクが高いと分かれば、再発を防ぐ治療に素早く取り組める。大阪市で開催中の日本癌学会で24日発表する。



肝細胞がんの治療は主に、病巣のがんを切り取

る必要がある。質で、種類によって働き

たり、がんのサイズが大きいと比較的小さい患者73人から切除した病巣

の再発リスクが明らかになる。

また、小さな病巣に含まれるマイクロRNA

の再発リスクを調べる。研究チームはがん細胞

の再発リスクを調べる。研究チームはがん細胞

の再発リスクを調べる。研究チームはがん細胞

の再発リスクを調べる。研究チームはがん細胞

い人に比べて治療から3

年後の生存率が40%以上悪かった。5年後の生存率も30%悪く、統計的に有意な差が見られた。国内では、肝細胞がん

で毎年3万人以上が亡くなっており、がんとしては4番目に多い。病巣を切除した後には再発リスク

が高いと分かれば、肝移植を急いだり、再発を防ぐ治療を徹底したりすることができると期待されている。研究チームは今年度中に40〜50人の患者を新手法で調べて、予測精度を確かめる。診断法を実用化するには10年以上かかるとみられる。

がん病巣の大きさや数、目印となるたんぱく質などを調べて再発リスクを見積もる方法が研究されている。多数のマイクロRNAを使えば、より精度の高い結果が出る可能性があるという。